

## 『審判員としての心がけるべき事』

### ■主旨

試合を公平且つ平等にそして、エキサイティングに安全に遂行させ、選手（子供たち）のポテンシャルを最大限に引き出すと共に観客のワクワクする楽しい試合にするために、審判員は以下の事に留意して臨む。

### ■試合前

- (1) キックオフの 10 分前には、本部に集い試合に備えます。  
⇒集合時間が示されている場合は、その時間に従いましょう。
- (2) 試合に関わる人と挨拶を交わします。  
⇒主審・副審・予備（第 4）審判、審判アセッサーと握手等で会話をし、コミュニケーションを確保してみてください。
- (3) フィールドを確認します。  
⇒必要に応じて、会場責任者に依頼したり、自ら修正をします。  
特にハーフェイライン、ペナルティエリア、ゴールエリアなどの、横のライン、およびタッチラインが見易いか？確認しましょう。
- (4) 大会規定等を確認します。  
⇒試合の時間、交代人数、延長等の有無などを確認します。  
⇒学年により時間が異なります。C クラス（4 年生）も 20 分ハーフとなります。  
間違えないようお願い致します。
- (5) 試合球の有無、ボールの空気圧やフラッグなどの用具を確認します。  
⇒現状は当該チームより持ち寄ります。0.75～0.8 気圧が適当と思われます。
- (6) 準備体操を含めて、ウォーミングアップをしっかりとしましょう。  
⇒ケガ、事故の防止、心と体の準備をし、自分の体調の確認をします。  
⇒腱や筋などを痛める事が多くあります。水分補給も含めて、自己の管理を行ってください。
- (7) 審判団として協力する準備として、意識合わせのための打ち合わせをします。  
⇒以下の打ち合わせ事項に即して、意識合わせ、意思疎通に十分配慮ください。

### ■試合中

- (1) 全力で審判を務めます。  
⇒試合は競技者が競技規則に則ってプレーするものです。主役は、競技者でありチームです。  
⇒笛（ホイッスル）は、自信を持って大きく吹くよう心がけてください。  
⇒長い笛、短い笛など、場面に依りて笛の音に強弱も含めてアレンジされると尚良いと思います。  
⇒遠目から眺めるのではなく、プレーヤーとプレーヤーの間で起きる事象（特に手を用いた反則）を見逃さないようポジショニングに注意すること。
- (2) 審判団として協力し合います。  
⇒主審、予備（第 4）審判、副審間でのアイコンタクトの徹底、細かなジェスチャを含めて相互の合図や約束事を実行します。

### ■試合終了

- (1) 両チームの代表を本部に呼び、試合結果の確認、内容の確認をしましょう。  
⇒点数や反則、その他について確認し合い、しこりを残さないよう努めましょう。

- (2) 試合について自分自身で振り返ります。  
⇒経験値の向上のため、担当した審判間での確認を行いましょう。  
⇒試合中、疑問のあった競技規則などを確認し合ひましょう。
- (3) 審判アセッサーの指導や仲間のアドバイスに耳を傾けます。  
⇒本部などから、時折アドバイスが入る事があると思います。耳を傾けて確認を行ってください。

\* ===== \*

#### ●主審と副審および予備（第4）審判の打合せ事項●

※主審担当の方の主導のもと、以下の内容を参考に意識合わせ、コミュニケーション方法等の打ち合わせを10分程度行ってください。

基本的に上級審判の方が、経験の観点から主審を担当頂く事が好ましいと考えますが、審判の育成も考え担当を割り振ってください。

その場合は、副審判（A1：ベンチ側）に上級審判を配し、ベンチコントロール等配慮ください。

また、試合の勝敗の行方などによって緊迫する試合などに関しても、経験の有無は十分考慮して役割の決定をお願いします。

- (1) 競技会規定、大会規定等を確認します。  
⇒試合の時間、交代人数、アディショナルタイムの有無、延長等の有無など確認し、意識を合わせます。
- (2) 審判相互の時計の確認をする。  
⇒主審はランニングタイマー（試合開始から通して流れる時計）とカウントダウンタイマー（試合時間の残りが判る）の2種類の時計を可能な限り装備。  
⇒副審および予備（第4）審判は、カウントダウンタイマー（試合時間の残りが判る）を可能な限り装備。
- (3) 主審の採用する対角線と副審の受け持つサイドの確認。  
⇒主審は『S字』を描く対角線審判を心がけるが、副審の受け持つサイド（概ねタッチラインからペナルティエリアの縦の線程度までの部分）に関しては、積極的に副審によりジャッジを行う。  
⇒特に死角になりがちな手の反則（身体・衣類を挿む、引っ張る）に関しては、十分注意する。
- (4) 前半と後半の終了時の合図や、アディショナルタイムの伝達の仕方  
⇒例えば、主審が、予備（第4）審判、A1の副審などへ腕時計をもう片方の手の平で覆うジェスチャをしたらタイムアップであると決める。  
⇒例えば、主審が、予備（第4）審判、A1の副審などへ指を立てた本数が、アディショナルタイムであると決める。など、時間に関しても、ワンタッチや得点シーン、ペナルティエリアの中か外かなど、言葉ではなくジェスチャによる審判相互の合図を決める。
- (5) スローインのときの監視の分担  
⇒例えば、主審は手や身体の動きを含めた上半身中心に、副審は、足元（足の上がりやオーバーライン等）を中心など分担すると、ジャッジが明確になると考えます。（私見ですが、4年以下の試合に関しては、サッカーのプレーを重視させたく、ファウルスローに関しては、よほど酷く足が上がったりオーバーラインをしない限り、一貫して見逃す事を提案致します）
- (6) 副審サイドの反則に対する合図の仕方  
⇒(㊦)や(㊧)に関連する事となりますが、まずは反則の有無を明確にするために、真直ぐフラッグを挙げて振る。そして次に、反則の種類をジェスチャを含めて主審へ伝達する。などの方法を意識合わせします。タッチライン上、ゴールライン上などの線上のプレーをしっかりと見極めるために常にラインが見えるところまで動く事。GKのパンツキック時には、ハンドの反則有無を判断するため、ペナルティエリアの横の線のポイントでしっかり止まって見極める。

(7) ペナルティーエリア内の反則に対する合図の仕方

⇒(㊂)や(㊃)に関連する事となりますが、ペナルティーエリア内の反則は直接FKの場合は、フラッグでPKスポットを指し示すなどの合図を決めておくが良いと思います。

(8) 得点のときの合図。主審が確認しにくいときの得点の合図の仕方

⇒基本的に主審が副審とまずアイコンタクトで確認し、副審が頷くなどして得点を確認しましょう。得点を認める場合は、フラッグは振らずにアイコンタクト後、頷きフラッグを持つ手と反対の手にて優しくセンター方向へ手を差し出すなどのジェスチャーをされると良いと考えます。

⇒得点を認めない場合には、アイコンタクトに関して直立で首を横に振るなどして、認めない事を知らせます。反則があったのであれば、フラッグをその場で真直ぐ挙げて知らせます。

⇒主審が、納得がいかないもしくは、理由がわからない場合は、主審から副審のところに駆け寄り協議をすることをお勧めします。よほどの見逃しでない限りは、概ね主審の方が得点シーンへポジシヨンの近いポイントにいるはずですので、イニシアチブは主審にと考えます。

(9) 直接、ゴールを狙えるフリーキックのときの主審と副審の位置と役割分担や合図

⇒審判は、試合の開始時に両チームのキック力などを観察してください。ペナルティーエリア近辺もしくは5・6年の試合に関しては特に、直接ゴールを狙うFKがございしますので、注意が必要となります。その場合は、副審は、ゴールラインをしっかりと見えるポジションへ移動配置し、ゴールマウスへボールが完全に入るか否かを見極めてください。よくゴールバーに当たり下に跳ね返ったボールの判定やポストスレスレにてGKがかき出すようなきわどいゴールの判定を見極める為にです。

副審へ主審がそのポジションへ移動を促す場合もございます。その場合も速やかにゴールラインを見極めるようお願い致します。また、副審をその位置へ移動させておりますので、主審は、副審に相対する側まで移動し最終ライン（オフサイドライン）を見極めるポジションへ移動配置することになります。間接にしても、直接にしてもFKにおけるボールのセットは、審判は行わないこと。

また、審判は足でボールを扱わないこと、全て手で扱うこと。

(10) ペナルティーキックのときの主審と副審の位置と役割分担

⇒ゲーム中のPKについて

副審は、タッチラインよりやや内側（ペナルティーエリア近辺）まで入ってゴールライン上に配置し、GKの蹴る前での前への動きと、ゴールマウスへボールが完全に入るのか否かを見極めます。

主審は、ボールのセットポイント、ペナルティーエリア、ペナルティーク内にキッカー以外の選手が、蹴る以前に入っていない事を十分見極める。

⇒試合後の勝敗決定などによるサドンデス方式PKについて

主審は、ペナルティーエリア内にて配置し、ボールのセットポイント確認とキッカーの番号、得点星数を確認します。副審については、1名がセンターサークル内（センタースポット）に配置し両チーム間に配置し星数を確認します。もう1名は、ペナルティーエリア内のゴールライン上に配置し、GKの蹴る前での前への動きと、ゴールマウスへボールが完全に入るのか否かを見極めます。

また、GKをペナルティーエリア外で待たせます。

(11) オフサイドの判定と合図。副審の旗を採用しないときの主審の合図

⇒オフサイドの判定は、常に論議となる部分であります。遅過ぎず、早過ぎず是非経験値の向上をお願い致します。オフサイドは、ボールに触れたポイントではなく、ボールが出る前に居たポイントとなりますので、十分留意してポイントに戻る事をお忘れなく。

⇒私がよく主審として副審の方々に打ち合わせでお願いするのは、フラッグを真直ぐ上に勢いよく挙げてください。その場で3秒数えてください。それまでに主審が気付かなければ諦めて通常のポジションに戻ってください。ほぼ気付くよう留意しておりますので、採用しない場合は、主審からフラッグを下ろす用合図を致します。プレーヤーに対しては、『続けて・・・』『ないよお・・・』等と副審判への下ろす合図と同時に声をかけます。

(12) 試合の記録(交代・得点・警告・退場)

⇒現状は、予備(第4)審判に多くの割合で管理して頂いているかと思えます。

主審に関しても、試合の流れを極力止める事が無いよう(メモの時間を可能な限り短く、メモのタイミングを上手く図る)にする事が大切です。特に得点後は、主審はセンターサークルまで走って戻り、センタースポットに選手たちによってボールがセットされるまでの時間を利用してメモを取るなど、アウトオブプレーの合間になど工夫をして、試合の再開を可能な限り早くすること。

選手(子供)たちが、メモが終わるのを待っているような状況は作らないように心がけてください。

(13) 負傷事故発生時の対応と担架の管理

⇒主審は、ボールと選手、それ以外の周りの選手へも気を配り試合を遂行する必要があります。

負傷等が発生した場合は、極力インプレーの最中は試合を続け、アウトオブプレーでホイッスルを吹き試合を中断させます。負傷者のところに駆け寄り身体には触れずに声を掛け選手の状態を確認します。好ましくない場合は、ベンチへ対してスタッフ1名のグラウンド入場を促します。

スタッフを入場させた場合、いかなる場合でも一旦その選手は、ピッチ外へ出さなければなりません。

負傷選手が、スタッフと共にピッチ外へ出たら、中断していた試合を通常の再開で開始します。

処置を終えた選手は、予備(第4)審判もしくは副審は、治療の確認、出場の可否を確認し主審へアイコンタクトその他の合図で再入場を伝え、主審の承認のもと再入場が認められる。再入場に関しては、試合は必ずしも止める必要はありません。ただし、頭や緊急と思われる負傷の場合は、主審はインプレー中であっても、ホイッスルにて試合を中断させ、負傷者へ駆け寄り上記と同対応をとる事。その場合試合の再開は、主審によりドロップボールとなります。試合を中断させた時の状況を鑑みたドロップボールでの再開へ配慮する事。

(14) 交代の手続きと用具の点検

⇒交代に関しては、試合中もハーフタイムに関しても、予備(第4)審判にてユニフォームや番号の確認、用具の確認(装備品の有無、ミサング等の装飾品の有無)を行った後、アウトオブプレーの時に主審の承認のもと交代が認められます。

(15) ベンチの管理

⇒予備(第4)審判を中心に、言動に関しての牽制を行う。副審(A1)に関してもサポートを行う。

ここで補足として予備(第4)審判について、記します。

メインの職務は、主審の補助(万が一主審が怪我などで審判職務を継続できない場合は代行をします)となり、その他にベンチへの牽制(給水タイムや試合中の指示、言動、マナーに反する行為に対しての注意・抑止)、主審からの合図(例えば、アディショナルタイム等)のベンチへの伝達、交代選手に対する、確認と用具等のチェックなどがございます。傍らに座って試合を観戦するのではなく、審判としてボールの行方、主審合図、両ベンチの動き、得点者、反則者、タイムキープなど上記の他にも注意して担って頂く大切な職務であります。ご理解願います。

\* ===== \*